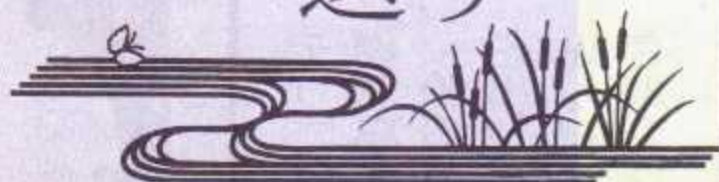


# 野辺の送り



いである一人ひとり  
りを救い取らずに  
はおかぬぞ、に出  
会えたやさしさが  
凝縮されている。  
先人たちは、受け  
継いだ願いを珠玉  
の一言に残して、  
浄土へ還って行か  
れた。

夜明けとともに、トンビが  
鳴く。トンビの子がそれをま  
ねる。呼応し合って賑やかだ。  
夏の夜の短さを人生のはか  
なさに譬えて、高浜虚子は、  
「明易や花鳥諷詠南無阿弥  
陀」と詠んだ。  
一茶（法名）は通り過ぎる

風に、「涼しやな弥陀成仏  
の此の方は」と受け止めた。  
そして、千代尼（法名・素園）  
は、「月も見て我はこの世を  
かしく哉」を辞世の句として  
往かれた。「かしく哉」は「あ  
なかしこ」と同じく、ああ、  
勿体ないことです、である。  
これらの句には、弥陀の願

まして、身近な人は、どれ  
ほど尊く深い願いを、この  
私にかけ続けておられたこと  
であろうか。おかげさまで、  
あなたが、この世で、私に会  
ってくださいました。南無阿  
弥陀仏。  
（珠州市・真宗大谷派西勝寺  
住職、西山郷史）